

## 論説

# 芸術作品を通じた人のつながりの構築と地域活性化の可能性

——新潟市における芸術祭と住民活動を事例に——

越智 郁乃

## はじめに

近年、日本各地で現代芸術の国際展が開催されている。国際展は一般には芸術祭と総称され、2013年だけでも瀬戸内国際芸術祭（香川県）、中之条ビエンナーレ（群馬県）、あいちトリエンナーレ（愛知県）などが開催され、多くの人々が作品を観るために開催地を訪れている。「アート・ツーリズム」ともいべきこの動きは、既存のマス・ツーリズムのオルタナティブとして、有名観光地や景勝地を持たない地域の「まちおこし」と言われる活性化策として期待されている。しかし、地方自治体が現代芸術祭を開催する際、「芸術」という「難解さ」を伴う作品への批判や、そのような作品の制作・展示、作家の選定に関わるアート・ディレクターや作家への報酬に税金が用いられることに対して、公益性を担保できるのかという批判がある。

本稿では、こうした芸術祭に対する批判や問題点を踏まえたうえで、芸術祭における作品制作・展示の現場に関与する住民の活動に注目する。芸術祭の中には、美術館等の美術作品展示に特化した建物ではない場所で作品が制作・展示される場合がある。基本的に主催者側がコーディネートを行うが、実際には場所の選定、作品の制作や芸術祭期間内の展示に開催地の住民の協力が欠かせない。本稿ではこの過程を通じて生じるミクロな社会関係を明らかにし、芸術祭を通じた地域活性化の可能性について論じる<sup>1</sup>。

## 1. 問題の所在

国際展とは、数年に一度の周期で美術館やその他の公共空間、文化遺産などを会場に催される現代美術の展覧会の一つであり、隔年で開催されるビエンナーレ、三年に一度開催されるトリエンナーレなどがある。代表的な国際展は1895年から断続的に続いている「ヴェネツィア・ビエンナーレ」が華

げられる。日本では1952年から1990年にかけて「東京ビエンナーレ」が開催されたが、それ以降継続しなかった。国際展が再び開催されるようになるのは2000年前後で、「福岡アジア美術トリエンナーレ」（1999年～）をはじめ、「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」（2000年～）、「横浜トリエンナーレ」（2001年～）、「神戸ビエンナーレ」（2007年）、「水と土の芸術祭」（2009年～）、「別府現代芸術フェスティバル混浴温泉世界」（2009年～）「あいちトリエンナーレ」（2010年～）、「瀬戸内国際芸術祭」（2010年～）など、大都市から地方までに至るまで全国各地で開催されている（福住2011）。

いずれの芸術祭も国内外のアーティストを招き、一定期間アートによって祝祭的な空間を演出するため、多くの国際展は観光産業と結びつき、地域振興が期待されることも多い（福住2011）。例えば、過疎の中山間地域である新潟県十日町市を中心に開催された「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ2012（第5回展）」では、二ヶ月半の会期中約49万人の入場者数を記録した。来訪者の消費支出は約29億円にのぼり、地域経済の活性化をもたらした（大地の芸術祭実行委員会2013）。しかし、芸術祭の集客や経済効果をめぐっては、批判も起こっている。

例えば、香川県を中心とした瀬戸内海沿岸地域及び離島地域で開催された瀬戸内国際芸術祭（2010年開催）では、93万8千人の来場者数を数え（瀬戸内国際芸術祭実行委員会2010）、経済効果は直接効果分だけで64億円、一次、二次波及効果を含めると111億円に上った<sup>2</sup>。その報告に対し、集客数計測方法や県および関係市町の負担金に対する効果が不明瞭であることが指摘されている<sup>3</sup>。また、2013年に名古屋市を中心に開催された「あいちトリエンナーレ」に対しては、新聞紙上では「お堅い美術展」と異なり「親しみやすいアート」と評価されるとともに、舞台芸術に対する観客数が一回目より減少したことやテーマの難解性が問題視され、「愛知という観光地として特色のない地域において開催する必然性」を持たせないと、「よそから持ってきた現代アートなるものを集中的に縦覧させて、地元を疲弊させるだけだ」と指摘されている<sup>4</sup>。

こうした芸術祭における評価記事を見る限り、芸術祭は以下の二点に評価基準が集中していることが指摘できる。まず、①集客数や負担金に対する費

用対効果、そして②作品に対する「分かりやすさ」「親しみやすさ」である。

負担金として行政が税金を用いるからには、使用に対する説明責任が生じるが、行政や地域住民にとって「まちづくり」や「まちおこし」と呼ばれる地域活性化に対する成果となると、必ずしも観光客数や観光客によってもたらされる経済的効果のみが「活性」を示すわけではない。それにも関わらず、費用対効果をめぐるやり取りにのみ収斂していることは、芸術祭を既存の観光地の代替地としてのみ考えていることの表れである。すなわち、行政の側も批判する側も、いつまでもマス・ツーリズムを基にした振興を図る「ものさし」しか持ちえないということになる。そして、数としての明快さで効果が計られるように、作品も万人に「分かりやすい」ならば多くの人が来場し、芸術祭を開催するだけの費用対効果が得られることにつながる、と考えられている。

しかし、そもそも作品に対する「親しみやすさ」「分かりやすさ」というのは、行って観た人によって評価されるはずである。それなのになぜ最初から「堅さ」や「親しみやすさ」という芸術に対する「ものさし」ができていたのだろうか。河原啓子は、近代日本における美術をふくむ芸術受容のあり方について、「美術館」というシステムをヨーロッパから輸入することによって、限られた者だけが収集・鑑賞していたものが不特定多数に開かれたというより、日本の近代化のために西欧文化・システムの導入という役割があったと指摘する。博物館や美術館は美術・芸術・文化遺産に価値づけをして収集活動し、さらにそれを公開することで社会に認知させるという見方・見え方の教化を行う場になった。しかし、日本ではその後、新聞社などのメディアが中心になって展覧会を主催し、会場に百貨店が用いられることで、美術は「見世物」化していく。さらに写真等の複製技術が発達すると、メディアによって作品を観る前から作品の情報を得ることが可能になる。こうして日本では、美術鑑賞という「教養化」と「消費化」が進行していったという（河原 2001）<sup>5</sup>。

河原の指摘を踏まえると、現在の芸術祭に対する評価は、作品そのものを抜きにしてイベントとしての評価でのみ成立しているのである。一方で、芸術祭の開催にあたっては、主催者である行政関係者以外の開催地住民の関与

は欠かせない。作品制作、展示の過程に関わる人々の動きを含めて、地域にどのような影響を及ぼしているかという点で、芸術祭が評価されるにはどうしたらよいのだろうか。

このような状況を打開するにあたり、示唆を与えてくれるのがジェルは芸術人類学に関する議論である (GELL1998)。ジェルは、「芸術的な状況 (art-like situations)」やそこで生まれる「作品」を、西洋由来の美術制度やその中で発達した審美体系によって規定しない。作品は何か象徴するものでもなく、反応や行為を引き起こす、いわば人の行為を媒介するもの (agency) であると捉える (GELL1998 : 5-7)。つまり、作品に対して「それは何を表現しているのか」「いったい何を意味しているのか」という問いから出発するのではなく、むしろ「それは何をやる (引き起こす) のか」という視点から見るという態度変更である。ジェルは、作品が社会的なエージェント (agent) であり、制作者である人の行為を拡張し、媒介するようなエージェントの視点からの議論を展開している (床呂・河合 2011)。作品のエージェントを通じて、作品の周辺には複雑なネットワークが生まれる。芸術や芸術作品を通じてつながる人と人の社会関係こそ、芸術や芸術作品を成り立たせるのに重要であるとジェルは述べる (GELL1998 : 5-7,16-19)。

このような議論を踏まえ、芸術祭においても「作品批評」や「動員数」だけでなく、「作品を介した社会関係」を中心に検討し直して見る必要があるだろう。そこで本稿では、芸術祭において作家や行政関係者以外の人々、とりわけ開催地の住民が作品制作から展示にいたるまで様々な形で参与することで完成する「サイト・スペシフィック」作品を取り上げて考察する。

サイト・スペシフィックとは、芸術作品やプロジェクトの性質を表す用語で、その場所に帰属する作品やおかれる場所の特性を生かした作品、あるいはその性質や方法を指す。場所の特性とは、その土地の環境や生活空間、歴史的、政治的、文化的な場の成り立ちまで含まれ、作家がそれらの諸条件に注目して作品に組み込む。制作や設置の過程では、作家が現地に滞在しながら、市民との議論を重ねて制作していく「ワーク・イン・プロGRESS方式」を採用する場合もある (中山 2011)。これまでの芸術祭に関する評価の中で、「ワーク・イン・プロGRESS方式」をとった作品の制作・展示に関し、その

具体性をあげて批評や検討がなされることは管見の限りない。

以上を踏まえ本稿では、新潟県新潟市で開催された芸術祭及びそれに関連するアートプロジェクトを事例に、作品を介して社会関係がどのように構築されているのか、さらには制作過程や展示された作品が地域住民や地域社会にどのような影響を及ぼしているかということについて検討する。

本稿では以下のような構成をとる。まず、新潟市における「水と土の芸術祭」について概要を述べ、「市民プロジェクト」という地域住民との「協働」が新潟市以外での芸術祭を含めて重要視されていることを示す。それを踏まえてとりあげる新潟市の「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」では、具体的にどのような過程から地域住民によってプロジェクト応募がなされ、作家らとどのような過程で作品が制作されたか明らかにしていく。特に、その制作過程、展示期間における作品を通じて構築される人と人の繋がり、さらには作品自体が地域住民に及ぼす影響について論じる<sup>6</sup>。

## 2. 新潟市の「水と土の芸術祭」と「市民プロジェクト」

### (1) 水と土の芸術祭の背景

「開港都市にいがた 水と土の芸術祭」(以下、芸術祭 2012 と略称)は2012年7月14日から12月24日まで開催された。前回2009年に開催された初回の芸術祭「日本海政令市にいがた 水と土の芸術祭」(以下、芸術祭2009 と略称)は、近隣15市町村が広域合併し、平成19年に人口80万人の本州日本海側初の政令指定都市となった「新・新潟市」を記念して、篠田昭市長の提唱により始まった。広域合併した旧市町村、新たに八つできた区に共通するものが、信濃川や阿賀野川、越後平野といった「水と土」であり、広域合併した地域の人口交流を目的の一つとして芸術祭は開催された(新潟市文化観光・スポーツ部観光政策課2009、五十嵐2012b)。では、なぜ「芸術」が「手法」とされたのだろうか。新潟市での芸術祭の開催には、同じく新潟県内で開催される「大地の芸術祭」が大きく影響している。

新潟県では平成6年に「ニューにいがた里創(りそう)プラン」という地域活性化施策を開始し、一号認定をうけた新潟県妻有地区と呼ばれる十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町の六市町村が、平成8年に

芸術を媒介した地域振興プロジェクト「越後妻有アートネットワーク整備構想」を策定した。

「大地の芸術祭」総合ディレクターの北川フラムによると、この構想での主眼は過疎化が進み崩壊寸前の地域をどう立て直すかということにある。北川はこれを「公共事業の全面切り替え」と呼ぶ。従来の公共事業の場合、行政が計画立案し、後は業者が実行するだけのところを、地元で作家が入り、これまでの公共事業の十分の一程度の予算の中でワークショップを行い、地域をデザインするという作業を行う（北川 2013）。

例えば妻有の松之山の場合、芸術の導入の前に各地区の「財産」、「地域のよさ」について見直した。その際に浮かび上がった「森の再生」が松之山のテーマになった。「森の再生」、すなわち、人口が減って荒れ果てた棚田に新しい森を作るという目的で作家・川俣正が松之山に入り、地元の人や学生、若い人たちとのワークショップと作業を通じて、森の中をめぐる遊歩道や東屋などを含めた「森の広場」の制作を十年かけて少しずつ進めていった。「大地の芸術祭」では、「松之山プロジェクト」として訪れた人にその遊歩道を歩いてもらいながら、その地の風景を見せるという展示を行った。川俣は、作家の仕事は場の発見であり、擬似的なコミュニティをやることであるという。そして、その定着は地元の人とのコミュニケーション次第であり、その関わりの中で実現する。それゆえに作品はただの物やオブジェではなく、ひとつの運動体と捉えることが必要であると述べている<sup>7</sup>。このように、作家や作品を媒介した「協働」は、同じく北川がディレクションした他の芸術祭でも重要なキーワードになっている。

一方新潟市では、2007年の中越沖地震による風評被害や、北陸新幹線の開通で金沢に人が流れることへの懸念が高まっていた。なにより広域合併により広がった市域内で、市民が「共有できる物語」がない新・新潟市にとって、対外的にアピールできるイメージづくりは急務であった。芸術祭は全市民的な取り組みで市民が広がった市域を知り、対外的には芸術の街、水と土に育まれた豊かな街として発信できる取り組みだった（橋本 2012）。

初回の芸術祭 2009 では、新潟市全域 50 カ所で 61 人の作家が 71 作品を制作し、準備期間、作品の制作・展示期間を合わせて約一年にわたって市民

が様々な方法で関わった。例えば、地域での説明会、材料・場所の提供、実際の制作に関わる支援、作家との交流、会場の受付、バスガイド、地図や広報誌の発行、来場者へのもてなし、イベントの広報に参与した。そして、作品の観覧自体も支援であると考えられている（五十嵐 2012b）。

二回目の芸術祭 2012 においては、①現代芸術を制作する「アートプロジェクト」、②市民が自ら企画・実施するイベントなどの「市民プロジェクト」、③東日本大震災を踏まえた「自然との共生」をテーマにしたシンポジウム開催が三本柱とされた（新潟市文化観光・スポーツ部 水と土の文化推進課 2013）。特に②では、公募に対して審査を経て助成が与えられた各種団体により、様々な分野の 130 のプロジェクトが企画運営され、地域住民が主体となった作家・行政との「協働」が各所で行われた。本稿で取り上げる、「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」もその一つである。

## （2）「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」の概要

「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」は、解体が決まった旧亀田町庁舎（昭和 4 年竣工）を会場に作品を制作・展示することで、この地の過去と未来を考えることを目的として行われた<sup>8</sup>。

旧亀田町庁舎の一階では、「土からの記憶、そして再生へ」というテーマのもと、彫刻家の村木薫による作品が展示された。村木は亀田西中学校の生徒たちと「土の卵」を制作し（写真 1 参照）、郷土資料館から借り受けた田舟と藁で作った鳥を配置したインスタレーション（展示空間を含めて作品と見なす手法）<sup>9</sup>を行った（写真 2 参照）。加えて、近隣の農家の協力を得て、亀田諏訪神社で「藁にお」を制作・展示し、旧亀田町役場から諏訪神社までプロジェクトに参加した地域住民が練り歩いて奉納の舞を行った。

二階では、モノの上に画用紙をあてて色鉛筆で擦って作品を作るフロッターージュという技法を用いて紙の上に場所やモノの記憶を写す「亀田町役場の記憶 市民プロジェクト」が美術作家・酒百宏一によって行われた。庁舎建物や備品、カウンター、亀田での農業に使われた田舟、水車などの農機具をフロッターージュした酒百個人による作品とともに、亀田町周辺の小中学生がワークショップにおいて同様に作成した 5000 枚の作品を役場庁舎の二階の

部屋に敷き詰めて「湖」に見立てる作品を制作し、「湖」のほとりにほ艇と田舟も展示された（写真3参照）。このように作品の随所にみられる「水と土」は芸術祭のタイトルであるとともに、亀田郷と呼ばれたこの地域の歴史にも深く関連する。

旧亀田町役場庁舎のある亀田郷には、かつて「地図にない湖」があった。現在も市の四分の一が海拔0m地帯に位置するが、とりわけ亀田郷は、郷域の1万ヘクタール中7割が海拔0mにあたる（亀田郷土地改良区1977）。腰まで水につかりながら田舟を用いて行われたこの地での戦前の農作業は、困難を極めた。戦後設置された機械排水や土地改良により乾田化されたが、農閑期には排水がとまれば「湖」が現れる。そのため「地図にない湖」と呼ばれた（写真編集委員会1990:16）。

村木および酒百を作家として迎えたそれぞれのプロジェクトには、この亀田郷の歴史が深く刻まれるとともに、ワークショップや鑑賞を通じて参加した学生や市民が歴史を共有して行くという過程が重視される。しかし、このプロジェクト自体、芸術祭2012において単発で開催されたものではない。プロジェクトに至るまで、長い経緯と様々な人との関わりがある。

### （3）プロジェクト運営母体と芸術祭参加の経緯

亀田町では芸術祭2009から2013年現在まで、各種アートプロジェクトが進行している。芸術祭2012では市民プロジェクトの一つとして「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」が開催された。そのプロジェクト運営母体「がっとかむかめだ」は、美術館でもアートNPOでもなく、福祉NPO団体である。

NPO代表のAさん（女性）は東京出身である。新潟出身の男性と結婚して東京で暮らしていた。今から三十数年前、義父母の介護のために東京より新潟市江南区に引っ越してきた。介護や子育てが一段落した十年ほど前、ボランティア活動を始めた。最初は生活している江南区ではなく中央区で行っていたが、次第に「足下でやらない」と感じたという。親戚や友人をあてにしない地域による助け合いのシステムを作ることを目的に、まず地域の高齢者の「居場所作り」を始めた。もともとは友人らが集まってそれぞれの家

でおしゃべりをしていたが、夫が定年すると一日中家にいるので、なかなかそれぞれの家に行きづらい。そこに、Aさんの叔母が暮らす家の隣が空いているという情報を得た。息子や娘は別の場所に家を建てたため、代替わりした後誰も住むことがなく家財道具が残り、それらの処分にかかる労力を考えると売りも貸しもできないという事情を抱える家が多い。叔母の家の隣家も、そのような事情で住人不在の状態が続いていた。そこで、家具等の処分労力を担う代わりに、光熱費負担のみの家賃なし、という条件で借り、そこに皆で集まるようになった。しかし、駐車場が必要になって別の空き家をまた借りて、というように施設改善を求めて数度か移転を繰り返した。その過程でAさんは、当初の井戸端会議のような雰囲気集まりから、次第に互助組織を立ち上げた。その後、高齢者だけではなく、ニートや引きこもりの若者の支援も含めた助け合いの組織「ボランティア亀田」を作っていったという<sup>10</sup>。

そのボランティア組織を基にし、居場所づくりの一つとして「がっとかむかめだ」は立ち上がった。運営費には、新潟市の商業振興課「まちなか活性化」事業の一つとして2010年から助成を受けた。「がっとかむかめだ」があるのは、亀田本町通りという商店街にある元玩具屋の空き店舗である。建物の中にはテーブルが三つと椅子十脚ほどが置かれ、通りかかった地域住民らがふらっと立ち寄って休み、おしゃべりができる場所として機能している。日中は常駐するスタッフ数名が訪れた人にお茶を出す。お茶葉は近隣のお茶屋さんから、水は近所の商店からくみ上げた地下水が提供される。施設内の半分では、亀田縞という地域特産の織物の委託販売を行い、織物の実演も行っている。

この「がっとかむかめだ」がある亀田本町通り商店街は都市の空洞化にさらされおり、「町からどンドン人が減っていくことに危機感を覚えた」とAさんは語る。そこで、亀田の歴史を知る機会を作ろうと、芸術祭2009の一環として江南区のショッピングセンターで、亀田縞に関する資料や機、農機具など、大正末期から昭和初期の地域の農業・産業史に関する道具やパネルの展示を企画した。さらに、こうした地域の歴史の次世代への継承が必要と考え、NPOから地域の中学校に呼びかけて「地域を知る学習会」を行い、生徒たちが展示のボランティアガイドとして立つ機会を作った。また、亀田

東小学校区コミュニティ協議会与連携して、亀田地区に立つ市や町並みをめぐる「まちあるき」も実施した。その後は子供たちだけでなく、教員を対象にした「まちあるき」も実施している。その理由は、周辺の小中学校では、転勤を繰り返すため地域の歴史を知る教員が少なく、学校で地域の歴史を教えることがなかったからである。こうした活動が近隣小中学校の生徒や保護者、教員の好評を得て、メディアにも取り上げられるようになった。Aさんによると「町の歴史を知るようになって、町に愛着を感じる子供たちが増えた」と話す。

### 3. 参加作家と制作過程における地域住民との関わり

上述した地域の活動に加えて、芸術祭 2009 に始まるアートプロジェクトが現在に至るまで継続している。本節では、参加作家と制作過程において地域住民がどのような関わりを持っているか明らかにする。

#### (1) 作家の芸術祭参加経緯と制作過程

##### ①村木薫の参加と地域住民との「協働」

亀田町のアートプロジェクトの第一弾として参加したのが、作家・村木薫であった。亀田本町の出身である村木は、商店街の「修復プロジェクト」を行った。もともと村木は、2000年の「大地の芸術祭」より松代町「修景プロジェクト」を行ってきた。松代では、地域住民とともに古い家屋のトタンをはがして元の土壁に塗り直し、家屋ができた当時の外観に修復した。芸術祭の期間はその家を休憩所にし、家屋を通り抜ける風を感じながら町の様子を体感してもらうという作品展示を行った。一年に一棟ずつ、現在までに九棟修復を行ったという。

新潟市で開催された「かめだ学会」という地区の歴史を学ぶ会にてAさんと出会った村木は、そこでプロジェクトへの参加依頼を受けたという。亀田本町の商店街において店舗の土壁修復を行うとともに、雁木と呼ばれる商店街の軒先を作る改修工事を現在まで継続している。加えて、亀田の小中学生とともに土からテラコッタポットを作成した。そこに葉牡丹の種を入れて本町通および周辺地域に並べ、地域住民に芸術祭会期中に育ててもらい、終了

後に中学生が回収するプロジェクトを展開した。村木へのインタビューによると、このプロジェクトは「地域に目を向ける仕掛け作り」であるという。例えば、通りで葉ボタンを育てることで、植物を育てる「責任」や会話をする契機が生まれる。プロジェクトに関わったある中学校教員によると、地域の人との関わりを作ったことで、学生が挨拶したり感謝の意を表したりといった対人的なコミュニケーションが取れるようになったという。

さらに 2011 年に村木は、亀田本町通りにおいて「この道を若き父母行き重ね通り過ぎたる記憶追いかける」ために、古いカメラ屋に残る大正期から昭和の亀田の様子を写した写真を商店街の店先に展示する「街角写真展」を行った。空き店舗の中では、写真と土の卵を融合した作品を展開した。また、近隣の神社の境内では、農家から貰い受けてきた藁を用いて村木が「藁にお」を制作展示し、奉納式を行った。奉納式では、新潟在住の即興舞踊家・松崎由紀が加わり、奉納式に先立って商店街から神社まで練り歩き、神社で舞を奉納した。このプロジェクトは芸術祭 2009、芸術祭 2012 以外の年にも継続して行われている<sup>11</sup>。

このように芸術祭 2009 と以降のアートプロジェクトは、A さん自身「芸術に関心はなかった」「まちづくりとは福祉の充実を図ることだ」と語るように、彼女にとってまちづくりの道具立てとして考えられている。しかし、道具立てにせよ「芸術祭」という媒体が加わったことにより、次の芸術祭 2012 において旧亀田町庁舎を会場として、また作品のモチーフとして使うことに繋がった。

A さんは、先述した「まちあるき」を通じて旧亀田町庁舎を紹介しながらその建物の歴史的重要性を感じ、「一人保存活動」を展開したという。といっても「一人」という言葉が示すように、団体で保存活動を行ったわけではない。「まちあるき」の際に、「新潟のシンボルである万代橋と同じ昭和 4 年に生まれた役場なんですよ。せつかくの建物を残したいですよ」と参加者に説明していたという。結局、建物の老朽化と同じ場所での新施設の建設が決定したことにより、旧庁舎解体は不可避となった。そこで芸術祭 2012 の市民プロジェクトに「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」として応募し、旧庁舎を作品の展示会場にする許可が市から下りた。芸術祭 2009 同様、

村木薫による作品の制作展示が行われるとともに、今回は作家・酒百宏一が新たに作家として加わることになった。

## ②酒百宏一の参加と地域住民との「協働」

酒百は、芸術祭 2009 が行われたときの最初の参加作家であった。制作準備として芸術祭 2009 の前年から新潟で生活し、各地域を見て回り作品を制作した。先述したように彼はフロッタージュという技法を用いて、様々なモノの形を紙に浮かび上がらせる。フロッタージュされるモノは建物、土地改良記念碑や農機具といった新潟の「水の記憶」をテーマにしている。彼はこれまで「Niigata 水の記憶プロジェクト」として、市内 28 カ所全 75 回（うち、直接指導は 57 回）のワークショップを開催し、中学生を中心とした地域住民による約 5000 枚の作品を仕上げた<sup>12</sup>。

芸術祭 2009 において彼の作品の舞台になったのは、旧木津小学校という廃校の体育館であった。江南区の木津は、亀田郷内の一地区である。大正 2 年の大洪水による堤防決壊「木津切れ」が起こった小阿賀野川は、この小学校の裏を流れている。昭和 4 年に小学校の改築に合わせて建てられたこの体育館は、閉校後も郷土資料館として利用されてきた。芸術祭 2009 では、ワークショップにおいて制作された 5000 枚の作品が床一面に波のように展示されるとともに、壁には酒百個人の制作による作品 89 点が展示された。

2010 年には取り壊しが決まった体育館において、「木津小学校の記憶＋にいがた水の記憶」という展示が行われた。芸術祭 2009 の作品を再展示するとともに、「小学校体育館の記憶を作品として残すことは今しかできません。皆さん、体育館の思い出を胸に、中に入って、床に触れ、色鉛筆で体育館の記憶を最後に残しませんか<sup>13</sup>」という酒百の呼びかけにより、地域住民の参加による最後のフロッタージュが行われた<sup>14</sup>。

このような経緯を踏まえて、芸術祭 2012 では木津小同様に解体が決まった旧亀田町役場庁舎でも、亀田町の記憶を有するモノとして庁舎の壁やカウンター、田舟や農機具のフロッタージュが行われ、庁舎の二階に展示された。芸術祭 2012 の終了後も酒百の関わるプロジェクトは場所を変えながら進行している。

## (2) 制作過程での作家と市民プロジェクトメンバーとの関わり

(1) からも分かるように、参加作家の作品は作家の名を冠しているが、作品は住民との「協働」なしには作りえないものである。ここでは、市民プロジェクトを運営するメンバーとして作家とともに制作展示に関わる人々の動きついてまとめ、市民プロジェクトを通じてメンバーがどのような役割を担ったかということについて論じる。

### ①制作過程：村木作品の場合

会場になった旧亀田町役場庁舎は、閉庁後も内部の備品がそのままになっていたため、まずはその片づけから始まった。2012年4月より「がっとかむかめだ」メンバーを中心に掃除と片づけを行った。同時に、村木作品、酒百作品いずれも、作品にかつて使われていた農具や田船を使用するため、土地改良区や郷土資料館にそれらの農具を借り受け、ワークショップ会場に運び込み、作品制作の準備を行った。

ワークショップは、2009年以降のアートプロジェクトを通じて関係を構築してきた小中学校で開催された。今回は地域の四つの小学校、二つの中学校の体育館、そして「がっとかむかめだ」で実施された。村木の作品の「土の卵」は、竹や金網をつかった卵型を作り、藁を繋ぎにした土を塗って行って完成する(写真1参照)。「藁の鳥」は、「がっとかむかめだ」でワークショップが行われて、主に近隣住民らが参加した。会期中も5~6回のワークショップを会場内で行い、「土の亀」を制作した。ワークショップの告知は、「区たより」、「区報」、新潟日報、芸術祭2012のHPへの掲載により行った。

芸術祭は7月に始まったが、作品は10月に映像投射が追加された。映像には、2009年以来商店街で掲示しているかつての亀田郷や亀田商店街の写真が用いられ、映像編集は「がっとかむかめだ」のスタッフが行った。

### ②制作過程：酒百作品の場合

芸術祭2012までは亀田を含む新潟市の広範な地域でのワークショップを通じて作品を作成してきた酒百宏一によるプロジェクトには、「酒百組」と呼

ぶべき彼の活動を支えるチームの関わりが大きい。

「酒百組」は芸術祭 2009 年の前年に芸術祭開催に向けて行われたワークショップ「おとなの放課後会議」（新潟市シティプロモーション推進課、NPO「まちづくり学校」主催）の参加者らが基になっている。「酒百組」の約 10 人のメンバーのうち、今回お話しを伺った二人（B さん・女性・新潟市外在住、C さん・男性・南区在住）は、新潟市の出身ではない。B さんは「おとなの放課後会議」に北川フラム氏が講演に来ると知ってその会に参加した。一方、新潟に暮らして 40 年になる C さんは「どうにか地域おこしをしないと、という危機感をもっていただけ、芸術に興味もなかったし、『大地の芸術祭』のよさは全く分からなかった」と語る。しかし、芸術祭 2009 の一年前から新潟市に入って、作品制作のためのリサーチを進めていた酒百宏一のサポートを行うにつれて見方が変わり、「改めて大地の芸術祭を観に行き『地域おこし』しているのだと気付いた」という。特に、「木津小学校の記憶+にいがた水の記憶」で木津小学校の卒業生や学校に関わってきた人々を動員したワークショップの開催を通じて制作過程を知り、作品に「作った人の顔が感じられる」ようになったという。制作過程における地域住民の関わり的重要性について、彼は以下のように語る。

作品だけあってもよくない。作品があるべき場所にないと違和感がある。作品は地域でできて地域の文化とか歴史を踏まえないと浮いてしまう。伝承されたものの中に作品がのってよくなる。そのためには住んでいる人たちが、中に入ってアクションを起こさないとだめだ。作品を媒介にして視点が変わる、人の見方が変わる。

彼らは 2008 年からの「酒百組」の活動を始め、芸術祭 2009 での木津小学校での活動を契機として、「どこの地域でも入っていけるようになった（B さんの語り）」という。そして、芸術祭 2012 では、木津小学校同様に取り壊しの決まった旧亀田町役場庁舎での作品の制作を行った。旧庁舎では、床一面と壁（床から三分の一ほどの高さまで）にも作品を貼り付けた。酒百の指示によりそれぞれの作品を直線に張り付けることになった。数ミリのずれが大

きなずれにつながるため、Bさんのアイデアにより部屋に糸を張って区画割を行ってから張り付けた。

しかし、5000枚もの作品を貼り付けるのは、時間と体力の勝負である。「酒百組」は、それぞれの仕事が終わってから集まり、連日連夜作品を貼り続けた。酒百自身は芸術祭 2012 の際には新潟在住ではなかったため、現場に連日訪れるということはなかった。しかも、「酒百さんは、たまにふらっときて、『あれは…』とぼつとアイデアを出していった（Cさんの語り）」という。その時は「え～、私たちがこれをするの？と思うけど、後でそれが凄く重要なことだったりするんですよね（Bさんの語り）」という。最終的に 5000 枚のプロッターージュによる「湖」の畔には、田船と解が配され作品は完成した（写真 4 参照）。

こういったエピソードを通じて Bさんは、「私たちは市民と作家のつながりの窓口として機能している」と述べる。その一方で、Cさんは「自分の思いがカチつとはまると、作家の思いとかどうでもよくなって（作品が）自分のものに思える瞬間がある」とも述べる。このように制作に関わる過程で、自分たちを作家の意図を伝える媒体として考えたり、それだけでなく作品への自負心や愛着を引き起こしたりもしている。それが「酒百組」の次の活動につながっている。

### ③展示期間中

展示期間中の会場管理は、「がっとかむかめだ」スタッフによって担われた。管理を行ったスタッフ Dさん（男性・江南区在住）は「特に美術ファンではない」と語る。彼は 2009 年頃から、亀田で行われるイベントの人員整理など手伝っていた。芸術祭 2012 の際には、会場管理の人員を探す係になったが見つからず、自らが管理担当者となった。会期中には亀田町庁舎の鍵の管理、作品の保守点検、映像作品の電源管理、来場者にお茶や水をふるまう「もてなし」や、作品説明を行った。

会期の 7 月から 12 月までの約半年にわたる長丁場の間、当たり前のことであるが夏は暑いし、冬は寒い。旧庁舎は美術展示に特化した会場ではないため、作品の管理には苦労した。例えば湿度の管理ができないため、紙を用

いた酒百作品の展示方法や管理には「酒百組」も苦勞していたという。古い建物であるため雨漏りが起こったり、作品の「湖」の中に鳥が飛びこんできたりしたこともあった。

また、二階に通じる階段は、役場として機能していた際には職員専用であったため、目立ちにくく狭い。そのため、二階にも展示があると気付かないまま帰ってしまう来場者もいたという。こういう出来事を通じて「人は意外と説明の類をみないんだ」とうことに気付いたDさんは、作品を観てもらいやすいように、工夫を始めたという。来場者に「二階も作品がありますよ」と声をかけることはもちろん、誘導するような仕掛けを考えたりもした。例えば会期中、二階では来場者が田船や水車でフロッターージュできるようにしていた。しかし、なかなか参加する人がいないため、一階で自分がフロッターージュすることで来場者の関心をひき、二階の作品へと誘導するように努めたという。誘導も含めた作品の説明に関して「説明しなくてもいいし、説明しすぎてもいいし。感動を受け渡せたらよいけれど、減るということは避けたかった」とDさんは語る。

一方で、フロッターージュすることで彼自身「作品作りにはまった」という。筆者が芸術祭終了後約一年たった段階でインタビューした際、Dさんは作品の写真を見ながら、「これとこれは僕が作ったものですね」と指差せるほどだった。その理由を「子供たちの作品って塗りこんでなかったりするんですよ。自分は会期中ずっとフロッターージュしていたから塗りこんである」と語る。このように、彼は制作段階から一階の村木作品に携わるとともに、フロッターージュ制作に没頭することで、彼自身が会場、作家、作品と来場者を媒介する存在になっていったといえる。

#### 4. モノと人との関係、モノを介した人と人の関係

以上、作家とともに作品制作に深く関わった市民プロジェクトメンバーについて論じたが、単発のワークショップ参加者や、ワークショップに関わらなかった人々には、芸術祭や作品を通じてどのような影響があったのだろうか。(1) 旧亀田町役場庁舎内各階の作品、(2) 庁舎自体について作品と人との関係、作品を介した人と人の関係について考察を行う。

### (1) 作品と人との関係

作品に対する対応は二通りに分かれる。一つは、急に愛着を感じて手放したくないと感じる場合である。この作用について、「酒百組」の B さんは以下のエピソードを語った。

芸術祭 2012 西蒲区での展示「のぞきからくり<sup>15</sup>」では、そこで使う人形を近所の人から借りてきた。もうぼろぼろで大事にされていなかった人形なのに、作品になったとたんに持ち主が「うちの〇〇ちゃん(人形の名前)を返して」と言ってきた。酒百さんの作品でも△△さんの奥さんが、自分の家からもってきた材料を使っているからといって観に来て『あ、うちの××があんなふうに使われている』とうれしそうに言っていた。

このように何気ない日常のモノ、または捨てられかけていたモノが作品化されることで、意味や価値が再度付与されるとともに、「生きたモノ」に変わる可能性をもっている。床呂・河合は、「日常無自覚に接しているものたちが、ある局面において自己主張したり、我々になにがしかの働きかけをしたり、場合によっては抗することもあり得る。さらに言えば、生活世界に存在する『もの』たちによって、われわれ人間が生かされているという側面を無視できない」と述べる(床呂・河合 2011: 1)。本論考の事例に即して言うなら、作品になるという局面を通じて、モノが生きた存在として自己主張し始めたのである。実際、二階の酒百作品の場合、「湖」に足を踏み入れてしまった人もいたという。通常、「絵画作品」とみなされるものを踏むという行為はタブーともいえる。しかし、来場者の中にはそれが「湖」に見え、中に入りたくなったと考えられる。さらには、閉庁後は忘れ去られていた各種届出用のカウンターをフロッタージュした酒百の作品を観て、作品ではなくモチーフとなった旧庁舎のカウンター自体を欲しが人も現れたという。こうした変化について C さんは以下のように語っている。

ずっとそこにあったものは、そのうちどうでもよくなって捨てられたり

する。でもそれに手を入れると、周りの人たちは気にし始める。すると人が集まって、大事なものだ気づく。

このように、プロジェクトを通じて見捨てられていた見向きもされなかったモノを対象化することで、作品に関わった人たちはCさんが言うように「新しい視点を得る」のである。

その一方で、個々が制作した一枚一枚の作品に対して執着しない場合もある。ワークショップで作成された酒百作品の場合、自分の作品、または自分の子や孫が作った作品だけを観るために会場に来て、どこにあるか探す場合もあるが、個々の作品の大半は引き取られないという<sup>16</sup>。村木作品の場合、そもそも材料からして「土」であるため、そのままにしておく風化して「土」に返るといふ。村木へのインタビューによると、彼は最初から循環型の作品を目指しているということもあるが、「アートという媒介物を通して、人と人の関係を作り直すことを意図している。だから作品は展示期間が終われば、作品の役目を果たしたと考えて壊す」といふ。作品の「土の卵」は土に返し、「藁にお」は燃やすか、堆肥として再利用される。庁舎という空間のために作成された一階二階それぞれの「サイト・スペシフィック」な作品は、その場所ではか作品でいられない。皆で一つの作品を作るという過程で構築される人と人との関係に昇華されれば、展示期間を終えた作品のピースは見向きされない存在へと変化すると考えられる。

## (2) 作品会場を介した人と人の関係：旧亀田町役場庁舎の存在

では、作品を展示した会場自体は、このプロジェクトが行われることによって地域の人々にどのような変化を引き起こしたのだろうか。

制作に関わらなかった近隣住民にとって、旧庁舎は突然「開放」された。会場管理を担当した「がっどこむかめだ」スタッフDさんによると、閉鎖されていた庁舎に連日照明が灯るようになったり、外から人が訪れるようになったりしたことで、不審がって尋ねてくる人がいたという。観覧者らの駐車をめぐってクレームが来たこともある。そのうち、会場では水道が使えないため、水を運んできてくれる近隣住民が現れたという。

一方で「がっとかむかめだ」スタッフと「酒百組」とでは、作品を展示した旧亀田町庁舎と地域住民の関わりに対する「評価」が異なる。「酒百組」は、木津小学校でのワークショップと比較した場合、地域住民の反応が薄かったと語る。それは、小学校と比べると、役場のほうが訪れる、また日常的に関わる人数が少ないことに由来していると B さん C さんともに考えている。

しかし、別の側面から考えるなら、役場は地域住民の人生の節目に関わる。例えば、芸術祭会期中に会場管理を行った D さんによると、会期中会場を訪れた近隣住民のお年寄りからは、婚姻届や出生届を酒百作品のモチーフになったカウンターで出した、という思い出が語られたという。D さん自身の出生届も、この役場から出されたという。また、役場に勤めていたという人や懐かしがって入ってくる人もいたという。そのような地域住民からは、「ここに〇〇課があって」というように、逆に元の役場の痕跡を教えてもらうことがあったという。このように作品制作だけでなく展示期間を通じて、一度閉じた旧庁舎が再び地域に開かれた。旧庁舎を媒体に、個々人の小さなエピソードがいくつも引き出され、「一つの物語」に収斂されない地域の歴史が語り直された。

## 5. 芸術祭を通じた地域活性化とは

本稿では、新潟県新潟市で開催された芸術祭において「市民プロジェクト」として地域住民を主体行われた「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」における二つのアートプロジェクトを事例に、作品を介して社会関係がどのように構築されているのか、さらには制作過程や展示された作品が地域住民や地域社会にどのように影響するかについて検討してきた。最後に先行研究との関わりから再度これらのプロジェクトを位置づけ直し、芸術祭を用いた今後の地域活性化についての可能性について論じたい。

本稿で明らかにしたように、「市民プロジェクト」に関わる人々は必ずしも「芸術」を仕事にしているわけでも、「芸術」に精通しているわけでもない。「芸術祭のサポーターや来場者の多くは美術ファンではない」と北川も指摘している（北川 2013）。しかしそれは、「芸術」というものは、教養ある人の特権ではなく敷居が低いものである、と言いたいのではない。開催地が中山

間の過疎地である「大地の芸術祭」にしても、広域合併によって誕生した新・新潟市の「水と土の芸術祭」にしても、参加した地域住民の根底にあるのは「日常に横たわる危機感」である。それが動機となって、プロジェクトへの参加につながっている。

上述したように芸術祭では祝祭的な空間を演出され、観光産業と結びつき、地域活性化が期待されることも多い。確かに芸術祭の時には様々な人が訪れて祭りの時のような賑やかな雰囲気を作ることは間違いない。しかし、「祝祭的な空間」の出現によって危機感が払えたわけではない。「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」の事例に即して言えば、プロジェクト参加以前から福祉 NPO 団体が地域の高齢者や小中学校の生徒・教員と紡いできた小さなつながりが元にあって、作品の制作のワークショップや展示が行われた。逆にいえば、行政と地域住民の間を結ぶ中間団体的な存在と、その団体を介した地域住民とのつながりがなければ、プロジェクトの遂行は難しかったであろう。そして、プロジェクトを通じた作家の参加、制作における「協働」、そして展示における小さな（時に「事件」も含む）エピソードの積み重ねは、地域を包括するような「一つの物語」を作り出すのではなく、新たな色のつながりの糸となって擦り合ったり、現在も後継のアートプロジェクトを通じて少しずつ関係が紡がれ続けているのだ。つまり、芸術祭は「祭」ではあるが一時的な盛り上がりだけではなく、より日常レベルでの様々な人々によるつながりに還元されることが重要なのである。

その一方で、芸術祭や作家の介入は、地域活性化の単なる道具立てに終わらない影響を地域の人々に与えている。水との戦いという地域の歴史や見捨てられそうなモノ、忘れ去られた庁舎が、制作や作品を通じて「生きたモノ」として目の前に現れることで、人々に「新たな視点」を提供する。それは、文献資料や座学の学習会だけでは知り得ない、地域住民の多様な地域とのつながりの歴史をあぶり出す。と同時に、手を動かし作品作りに没頭することや、多くの人に関わりながら作品を作る楽しさ、それが一つの作品になった時の感動もそこにはある。この二つが混じり合うがゆえに、芸術祭を軸にしたアートプロジェクトが、現在も地域住民を巻き込みながら進行しているといえる。

問題の所在で論じたように、現在の芸術祭に対する議論や評価のほとんどは費用対効果と「芸術」論に終始している。本稿で取り上げたように、作品が媒介する人間関係や地域社会への影響を含めて、芸術祭は何のために、そしてどのように行うのか議論していかなければ、芸術祭は単なるあだ花に終わってしまうだろう。

## 謝辞

現地調査に際してお話を伺った新潟県内の行政関係者の皆さん、村木薫先生（新潟中央短期大学）、アートプロジェクトに関わった多くの方々、現地調査の際に筆者をサポートいただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。なお、本研究の推進にあたっては福井大学可能性試験事業（研究題目：「ふくいのアートで『まちおこし』～芸術作品を活用した観光による地域活性化にむけて～」）の助成を受けました。また、「アートとエージェンシー」及び「モノのエージェンシー」に関する理論面の検討は、科学研究費助成事業（若手研究 B、代表者：越智郁乃、課題番号：2470391、研究題目「沖縄における墓地開発と宗教実践に関する文化人類学的研究」）の助成により行いました。記して感謝します。

[写真1]村木薫によるワークショップの様子（「がっとかむかめだ」提供）



[写真2]村木薫「土からの記憶、そして再生へ」(「がっとかむかめだ」提供)  
(左)庁舎の一階で展示された土の卵と田船と映像によるインスタレーション  
(右)庁舎内の作品から飛び立つように庁舎屋外に展示された藁の鳥



[写真3]酒百宏一「亀田町役場の記憶」(「亀田町役場の記憶」プロジェクト提供)



## 註

- 1 本研究に関わる現地調査は、2012年11月から2013年11月にかけて計5回3週間かけて行った。主な調査先は新潟県新潟市および十日町市、愛知県名古屋、神奈川県横浜市の芸術祭担当部署、各市のまちづくりNPO、アートNPO等。芸術祭、及びアートプロジェクトへの文化人類学的な参与観察及びインタビュー調査を通じて資料を収集した。
- 2 日本銀行高松支店及び瀬戸内国際芸術祭実行委員会による発表。  
<http://www3.boj.or.jp/takamatsu/econo/pdf/ss101220.pdf> (2013年12月1日閲覧)
- 3 田尾和俊(四国学院大学)「論点香川 瀬戸内国際芸術祭の決算～県民に投資額と内訳の報告を」(四国新聞2010年11月14日付)
- 4 「あいちトリエンナーレ2013 記者座談会 上・下」(中日新聞2013年10月28日、29日付)
- 5 近年、日本国外の美術館から絵画を借用して企画される特別展が各地の美術館で開催され、数十万人、時には100万人を集客することがある。例えばルーブル美術館展は特に人気が高く、2005年に開催(横浜美術館、京都市美術館)された時には約104万人、2009年に開催(国立西洋美術館、京都市美術館)は約146万人を集客した(大阪州市制改革室調べ)。いずれも新聞社の主催によるもので、この点から考えるとヨーロッパ絵画を観に行くという「教養化」と「消費化」が現在も日本において進行している。
- 6 現代芸術は、「現代アート」「アート」として表記される場合がある。本稿では「芸術」として表記を統一するが、引用、固有名詞やインタビュー対象の発言の中で「アート」と用いられた場合は、そのまま表記する。
- 7 北川フラムと川俣正の対談(北川2013:259-170)における川俣の発言による。
- 8 「旧亀田町庁舎を活用した地域プロジェクト」チラシに掲載されたプロジェクトの説明による。
- 9 インスタレーションとは、1960年以降に定着した新しい表現形態である。構築物が設置された空間全体が作品と見なされるため、絵画や彫刻などとは異なり、原則として一度制作した作品を別の場所へと移動することができない(暮沢2008)。
- 10 「ボランティア亀田」は会員制をとるボランティア団体で、現在約80名が登録している。
- 11 芸術祭2009、2012開催時以外のアートプロジェクトは、新潟市の助成を受け実施している。

- <sup>12</sup> KOHICHI SAKAO'S Website より。  
[http://www.sakao-lifeworks.com/workshop/Niigata\\_ws.html](http://www.sakao-lifeworks.com/workshop/Niigata_ws.html) (2013年12月1日閲覧)
- <sup>13</sup> 2010年の「木津小学校の記憶+にいがた水の記憶」配布チラシに掲載された酒百のメッセージによる。
- <sup>14</sup> 「木津小学校の記憶+にいがた水の記憶」は2010年8月28日29日、9月4日5日に作品展示とフロタージュのワークショップが行われた。また、9月4日5日には地元野菜・果物の販売、9月5日には、野菜を用いて面を作る棧俵（さんばいし）神楽、オカリナによる木津小学校の校歌演奏が行われた。
- <sup>15</sup> 「のぞきからくり」とは、縦横約4メートルの装置の下に取り付けられたレンズを通して、中の絵を鑑賞することができるもので、明治末期から大正時代頃に作られた「見世物」の一種。芸術祭2009の際には、1975年に巻町で発見された「のぞきからくり」を補修し、巻郷土資料館にて組み立てられ、劇術祭期間中は新潟市の美術館で展示された。
- <sup>16</sup> 酒百のプロジェクトによる作品は5000枚で一つの作品をなすと考えれば、その一枚に愛着を感じ持ち帰ることはあまりないのかもしれない。作家と制作にかかわった人々が作品のピース及び作品全体とどのような関係を結ぶかは今後の研究課題とする。

## 参考文献

福住廉

2008「市民芸術論的転回」ークリティカルな視点から見た『横浜トリエンナーレ2005』暮沢剛巳・難波裕子編『ビエンナーレの現在 美術をめぐるコミュニティの可能性』青弓社

2011「国際展」『artscape アートワード2.0』（Web辞典）

<http://artscape.jp/artword/index.php/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E5%B1%95>  
 (2013年12月1日閲覧)

GELL, Alfred

1998 Art and Agency : An Anthropological Theory. Oxford University Press.

橋本啓子

2012『水と土の新潟 泥に沈んだ美術館』アミックス

五十嵐政人

2012a「アートイベントの効能 『水と土の芸術祭』

『OMNI-MANEGEMENT』

2012b「市民が参加するアートプロジェクトー水と土の芸術祭ー」『社会教

- 育』 No.793  
亀田郷土地改良区  
1977『写真集 水と土と農民』亀田郷土地改良区編集  
河原啓子  
2001『芸術受容の近代的パラダイムー日本における見る欲望と価値観の形成』美術年鑑社  
北川フラム  
2013『アートの地殻変動 大転換期・日本の「美術・文化・社会」』美術出版社  
暮沢剛己  
2008『現代アートナナメ読み 今日から使える入門書』東京書籍  
大野左紀子  
2012『アート・ヒステリーーなんでもかんでもアートな国・ニッポンー』河出書房新社  
瀬戸内国際芸術祭実行委員会  
2010「瀬戸内国際芸術祭 2010 総括報告」  
写真編集委員会編  
1990『写真は語る 亀田の百年』亀田町  
中山亜美  
2011「サイト・スペシフィック」『artscape アートワード 2.0』(Web 辞典)  
<http://artscape.jp/artword/index.php/%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%B7%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%83%E3%82%AF> (2013 年 12 月 1 日閲覧)  
新潟市文化観光・スポーツ部観光政策課  
2009「水と土の芸術祭 2009 総括報告書」新潟市文化観光・スポーツ部観光政策課  
新潟市文化観光・スポーツ部 水と土の文化推進課  
2013「水と土の芸術祭 2012 総括報告書」新潟市文化観光・スポーツ部 水と土の文化推進課  
高野和久  
2012「新たな市民力の誕生 開港都市にいがた 水と土の芸術祭 2012」『社会教育』No.798  
床呂郁哉・河合香吏  
2011「なぜ『もの』の人類学なのか？」床呂郁哉・河合香吏編『ものもの人類学』京都大学学術出版会  
(ochiiku@u-fukui.ac.jp)